

第 1426 回 (5 月 9 日)

農家負債問題への一接近——

『農経調』の再集計を通して——

両角和夫

今日、農家の負債問題が喧伝されているが、その持つ意味と農業金融にとっての課題は、必ずしも明らかではない。それには、まず、負債問題の実態を明らかにする資料が未だ不十分であること、さらに、この問題に接近するための視角が必ずしも適切ではないことが挙げられる。

負債問題の実態把握に関しては、これまでも個々の農家や農協を対象にした実態調査、またサンプル農協を対象としたアンケート調査などがある。例えば、農村金融研究会の負債農家に関する実態調査 (62, 63 年度)、農林中金調査部の信用動向調査 (60 年度)、全中の畜産経営 (負債) 実態調査 (60 年度) などである。しかし、これらからは、固定化負債農家の分布、経営内容等を網羅的に捉えることまでは出来ない。

一方、負債問題の意味に関しては、亀谷教授が「全国的、平均的な農家経済状態下の負債問題ではなくて、きわめて地域的、階層的、経営組織性を持っており、それは固定化負債問題に象徴的に現われている」ものであり、さらに「一時的なものではなく、今後の日本農業の展開とともに繰り返して発生して来る可能性を持つこと」を指摘されている。また発生要因としては、経営能力不足、農産物の過剰化、農業金融機関の側の農家資金管理体制の不備等を挙げている。おそらくこうした問題把握が、これまでの多くの研究の到達点を表すものであろう。しかし、なぜいま負債問題か、わが国農業の今後にとってどのような問題か、どうすればよいかという問いには必ずしも十分に応えるに至っていない。その意味では、問題の整理が始まったばかりの状況にあるとあってよい。

本報告では、まず従来不十分であった全国

的な観点からの負債農家の分布、経営内容等の把握のため、農家経済調査の個表 (昭和 60 年度) を再集計し、若干の分析を試みた。

その結果、農家負債は一部の農家に偏していること (わが国農家の負債額上位数%の農家総負債額の過半が集積している)、また、これらの負債の分布と農家の農業依存度には強い相関があり、したがって、専門的農家や畜産農家などには負債の大きな農家が多く、かつその経営が不振であること、とはいえ大規模負債農家 (2000 万円) には過重負債農家と健全経営農家の両者に分かれることなどを明らかにした。これらのことから、専門農家など農業依存度の高い農家は概して固定化負債農家に陥り易い状況にあること、経営能力の問題の加味される必要があるが負債問題はきわめて構造的な問題であること等が指摘できる。

また、なぜいま問題かについては、経済基調の変化に伴うわが国農業、農家を巡る資金循環構造の変化を併せ考える必要がある。すなわち、農家の資金的な分解 (昭和 50 年代半ば以降、専門的な農家と非専門的な農家の間で資金ポジションが大きく変わってきたこと) と、農業の財政依存度の大幅な高まりと同時にこれまでの制度や補助金政策が変革期にあることなどを踏まえて考える必要がある。さらに、どのような問題かについては、まさに専門的な農業のいない手の存続が関わる問題であり、今後の対策としては、それらをどう補強し、あるいはどう新たな担い手をつくるかが問題となること。さらに農業金融のあり方についてもこうした観点に立って、農家、融資機関および行政のサイドから改めて検討する必要があることを指摘した。